

啄木のふるさと『もりおかの短歌』

第十八回年間最優秀賞決定！

啄木のふるさと『もりおかの短歌』事業は、啄木が生まれ育った盛岡を訪れる観光客や市民による、啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち もりおか』を推進することを目的に平成二十年より実施している事業です。

四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分けて募集し、一年間に応募のあった八三九首（一般部門）の中から第十八回目となる年間優秀作品が決定いたしました。今回も多くのご投稿をいただきありがとうございました。誌面を通じてお礼申し上げます。

年間最優秀賞（一首）

ふるさとの訛りで
喋り出しそうなの
天満宮の阿吽の石馬

山口県山口市 西野 早紀

【受賞者からのコメント】

大学四年間を過ごした盛岡は、私にとって第二の故郷です。散歩のたびに立ち寄った盛岡天満宮の狛犬の愛らしい顔が今でも鮮やかに思い出されます。そんな大好きな盛岡にちなむ「もりおか」の短歌で年間最優秀賞をいただき、身に余る光栄です。ありがとうございます。

【審査員講評】

（山本豊） 啄木は盛岡天満宮の境内にあるユ一モラスな表情の狛犬を石馬と呼び親しみ歌にも残している。その石馬が、ふるさとの訛りで喋り出しそうだという捉え方が歌を新鮮なものにしている。「ふるさとの訛り」は、啄木の歌の一部分を引用しているが許される範囲だ。

（外館） 歌い出しが石川啄木の有名な歌と同じで大胆でした。それでも、場所は、停車場でなく、天満宮。この阿吽の狛犬は、愛嬌のある顔をしています。啄木は「石馬」と呼んだそうです。作者の啄木への思いも深そうです。

（山本玲子） 思わず笑ってしまいました。「今日は暑いなはん」このモヤイ像のような顔をしたら石馬だったと言います。啄木もこの石馬について「克く見ると実に親しむべき愛嬌のある顔だ」と小説「葬列」に記している。上野駅でふるさとの訛りと一緒に石馬を思い出したら楽しいだろう。

（吉田） 啄木の愛した天満宮の狛犬（石馬）を詠んだ歌。ひょうきんで親しみのある姿から「ふるさとの訛りで喋り出す」という発想が生まれたのでしょうか。百三十年ほどの時を隔てて作者と啄木の心が通い合っているようです。

年間優秀賞（二首）

少しづつ記憶の薄れ行く父の
さんざ踊りに
笑顔あふれる

岐阜県岐阜市 田中 恭司

【受賞者からのコメント】

卒寿を目前に亡くなった父。晩年は、加齢とともに進む記憶障害との闘いでした。父の思い出を辿り、昨年は東北四県を妻とともに巡りました。また、啄木のふるさと盛岡を訪ね新たな発見とともに歌を詠みみたものです。

【審査員講評】

（山本豊） 衰えて多くの記憶が薄れゆく父であるが、さんざ踊りの響きが笑顔をもたらしてくれる。若い頃に感動を与えてくれたものは、

子の爪を

はじめて抓みし日に聞いた
さんざ踊りの太鼓の音色

兵庫県宝塚市 今北 まなみ

【受賞者からのコメント】

盛岡さんざ踊りの季節になると太鼓の音が心に響き渡ります。今もなお耳と目に刻まれた大切な記憶。華やかな衣装をまとった踊り手の皆さんの笑顔はふるさと盛岡のたからものです。これからは子や孫に伝えていきたいと思っています。

【審査員講評】

（山本豊） 「子の爪をはじめて抓みし日に聞いた」という上句の情感が、下句のさんざ踊りの太鼓の勇壮な響きを趣きの深いものになっている。太鼓の響きという勇壮なものだけの常識

著すすむ
次々重なる椀の山
笑い声まで積もってゆけり

東京都新宿区 三田 光希

【受賞者からのコメント】

研究学会に向かう道中で読んだ短歌がまさか選ばれるとは！大学の研究室の同期や先輩方と人生初のわんこそばを食べ、とても盛り上がりました。今度は後輩たちを連れて盛岡を訪れ、思い出を積み重ねたいです。

【審査員講評】

（山本豊） わんこそばの歴史は、江戸時代の初期に盛岡や花巻で始まったとされている。大勢の客に茹でたてを振る舞うための工夫が由来とのこと。蓋をするまで次々と椀にそぼが入れられる光景は笑いを誘う。

手帳より

まっ赤な紅葉すべり落つ
岩手公園は雪ならむ

愛知県一宮市 加藤 美智子

【受賞者からのコメント】

これまでの東北旅はいつも夏。秋の東北を見たくて昨秋初めて岩手県を訪れましたが、その紅葉の美しさに圧倒されました。思わず赤い手帳に手帳に挟み込まれた。今回の受賞で更に忘れられない旅となりました。

【審査員講評】

（山本豊） 手帳に岩手公園の様子なり歌なりを書こうと書いたのだろうか。手帳と紅葉と岩手公園と「は雪ならむ」の取合せが、岩手公園の初冬の趣きを深いものになっている。特にスマートフォンなどでなく、

年間奨励賞（二首）

「笑い声まで積もってゆけり」と表現したことにより味わいが出た。

（外館） それを直接には言わずに表現しました。スピード感があります。箸が進んで、山になる。その大食ぶりに、笑いも積もっていく。そうして「わんこそば」が表現されてきました。

（山本玲子） 「わんこそば」を食べながら賑わう団体客。旅の思い出の一コマをスナック写真のように切り取った歌。勝手な想像だが、作者は上品に召し上がったお茶を飲むようだ。何故なら椀を重ねると、お腹が苦しくなり、笑い声もなくなるからだ。

（吉田） わんこそばの楽しい雰囲気は伝わらず笑みがこぼれるような作品です。平らげればすぐ給仕されるわんこそば、重なる椀、お茶がいついづれでも掛け声に励まされお椀を重ねるようすに笑い声があふれます。

手帳であることで歌の品位が保たれている。

（外館） 上の句では分からないものの、下の句で盛岡の歌と分かれます。その紅葉は、旅先の「岩手公園」で拾って手帳に挟んでいたもの。滑り出てきて、離れた当地が思い出されました。紅葉の赤と雪の白の対比が鮮やかです。

（山本玲子） 作者は旅の思い出として落ち葉を手帳にはさんでおいたのだろうか。私も同じことしているの、この歌には親近感がある。「雪ならむ」とは「もう雪が降っているのだろうか」という意味だろう。旅を終えても岩手に思いを馳せていたに違いないとすら、うれしいこと。

（吉田） 旅の記念に何気なく手帳に挟んだ赤い紅葉。挟んだまま忘れていた紅葉が落ちた時、もう岩手公園は雪が降っていた頃だったかと思いを馳せます。紅葉の赤と雪の白、手帳に取められた時間の経過が印象的な作品です。